

令和 4 年 6 月 30 日現在

機関番号：18001

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K12375

研究課題名(和文) 過去分詞の動詞性と形容詞性 - 過去分詞形複合形容詞を手がかりに -

研究課題名(英文) Verbal and Adjectival Qualities of the Past Participle: With Reference to Past Participle Adjectival Compounds

研究代表者

野間 砂理 (Noma, Sari)

琉球大学・国際地域創造学部・准教授

研究者番号：70724970

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：ドイツ語の状態受動文あるいはコピュラ構文における過去分詞の素性を扱う従来の研究では、音韻論、形態統語論、形式意味論、語用論の分野で個別に扱われてきたが、本研究では、「(A)状態受動文の中の過去分詞」と「(B)状態受動文における項/付加詞を取り込んで複合形容詞の一部となった過去分詞」という二つの構文を、過去分詞形複合形容詞が形成前(A)と後(B)という連続した構文と見做すことで、その語形成過程における統語・意味・語用論的作用の違いにより過去分詞の動詞性と形容詞性が決定することを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、過去分詞形複合形容詞を伴うコピュラ構文が、状態受動文と意味及び統語構造において平行であるという特徴を、これまで意味論および語用論の分野で意見の一致をみなかった状態受動文における過去分詞の素性をめぐる研究に取り入れることで、これら二つの構文を同時に分析した。その結果、統語・意味・語用論が時として下位レベルの形態構造をも考察しなければならないこと、また形態論と密接に関わる語類の分析案を各分野へ還元することで、言語データを多角的な視点で分析することが可能となり、ドイツ語学全体の研究発展に貢献する可能性を示すことができた。

研究成果の概要(英文)：Previous studies on features of the past participle in conditional forms of the passive or copula constructions in German have dealt with them separately in phonology, morphosyntax, formal semantics, and pragmatics. This study considers that both (A) past participle in conditional forms of the passive and (B) past participle with an argument/adjunct in German form a part of an adjectival compound. This implies that a series of grammatical constructions, before (A) and after (B), form past participle adjectival compounds. Thus, differences in syntactic, semantic, and pragmatic functions during the process of word formation determine the past participle's verbal and adjectival qualities.

研究分野：ドイツ語学、形態論

キーワード：過去分詞の素性 過去分詞形複合形容詞 状態受動文 ドイツ語学 形態論

1. 研究開始当初の背景

先行研究における過去分詞形複合形容詞は、一語書きか否かをアクセントによって判断する音韻論研究(Hüning/Schlücker: 2010, Tödenhagen: 1974, Duden: 2006)、また形態論では逆成といった造語法の記述(Fleischer/Barz: 2007)、派生元と考えられる動詞が存在しない過去分詞の特定(Wilss:1986)、過去分詞と結合する第一構成要素の品詞分類(Fleischer/Barz: 2007)と意味記述(Pümpel-Mader *et al*: 1992, Fleischer/Barz: 2007, Hüning/Schlücker: 2010)がある。意味論・語用論の分野では、状態受動文とコピュラ構文の類似性が指摘されており、その中で過去分詞形複合形容詞は過去分詞の形容詞としての素性を規定するための手段の一つとして挙げられる程度である。語用論の分野では、過去分詞形複合形容詞との関連ではなく、状態受動文に変換できない活動動詞が文脈の支えにより許容されうることを示した研究もある(Maienborn: 2007, 2009)。このように、過去分詞形複合形容詞は様々な言語レベルでそれぞれが相互に作用することなく個別に論じられてきた。研究代表者は、これまでの研究で過去分詞形複合形容詞の内部構造を形態統語分析し、それらが複合形容詞化する前の動作受動文及び状態受動文の統語構造と平行であることを突き止めた。しかし、意味論と語用論の分野では、過去分詞形複合形容詞の統語的特徴を考慮せず、過去分詞の動詞性と形容詞性という学術的な問いが長年議論されている。そこで、これまで個別に扱われたがために説得的帰結が得られなかった状態受動文の中の過去分詞と状態受動文における項あるいは付加詞を取り込んで複合形容詞の一部となった過去分詞という二つの構文を、過去分詞形複合形容詞が形成される前と後という連続した構文と見做し、深層構造から表層構造への派生過程における統語・意味・語用論的作用の違いにより過去分詞の動詞性と形容詞性が決定される可能性があるという着想に至った。

2. 研究の目的

本研究課題は、過去分詞が動作受動文から状態受動文を経て、文中の項あるいは付加詞を取り込み複合形容詞化するという特徴を抽象的編入分析により明らかにした研究代表者のこれまでの研究を出発点とし、第一に、動作受動文のみを形成する動詞と動作受動文と状態受動文の両方を形成する動詞の意味論的な共通点と相違点を特定することで、状態受動文における過去分詞の素性(動詞性と形容詞性)に関与する意味を明らかにする。第二に、の動詞で形成した動作・状態受動文において、過去分詞と結合し過去分詞形複合形容詞を形成しうる項あるいは付加詞の意味論的な特徴を明らかにする。この調査により、最終的には[sein(be 動詞)+過去分詞]で表される状態受動文における過去分詞の素性を相対的に特定することが目的である。

3. 研究の方法

本研究では、一つ一つの過去分詞に形容詞の性質を適用したり、状態受動文に様々な文脈を与え認容度を調査するといったこれまでの研究手法を踏襲するのではなく、どのような動詞が動作受動文から状態受動文へ変換可能かという、これまで学術的に疑義を挟まれることが無かった点に解決への端緒を開くことを試みた。

対象とした動詞は、獲得を意味する動詞 11 個である。Levin (1993)による動詞の意味分類を参考に収集した動詞の過去分詞を伴う構文をコーパス(COSMAS II)で収集し、その中から動作受動文と状態受動文を抽出した。その際、どのような活動を経て獲得に至るかという意味特徴に留意しつつ、動作受動文のみを許容する動詞と状態受動文の形成までを許容する動詞とに分類した。両者の意味論的な違いを考察することで状態受動文の生成を阻害する意味、あるいは状態受動文の生成に必要な不可欠な意味を特定した。

これまでの研究で、Vendler(1967)が提唱する4つのアスペクト(状態・活動・到達・達成動詞)のうち、受動文が完全に阻止されるのは状態動詞、動作受動文への変換のみが可能なのは活動・到達動詞、動作・状態受動文のどちらにも変換されるのは達成動詞であることが分かっているが、動詞は様々な要因で他のカテゴリーに移行するので、活動動詞及び、その活動動詞に終点を加えた際、受動文の生成が変化するかどうかも8個の動詞をもとに調査した。

状態受動文の文法性判断には細微な意味の差異が含まれており、母語話者間で認容度が異なる。また、文脈を付与することで認容度が変わることから、本研究課題のデータ分析においては、

数名のドイツ語母語話者にインフォーマント調査を依頼し、意味分析の精度を高めた。

研究の最終年度は、状態受動文に取り込まれ、過去分詞と一語化する付加詞を収集・作成し、それらをまずは Pümpel-Mader *et al.* (1992) による 19 の意味的特徴(様態・道具・場所(状態と方向性)・原因・動作主等)を参考に分類した後、それらの意味特徴を緻密に記述分析する。

4. 研究成果

2018 年度は、ドイツ語の過去分詞形複合形容詞と状態受動文の先行研究を広く収集し、それらの問題点を検討した。例えば状態受動文が動詞語幹と同一のゼロ形態素および状態を表す形容詞的ゼロ形態素の二つを持ちうることを想定した形式意味論によるアプローチ(Rapp:1997, Kratzer: 2000)、文脈の支えにより過去分詞の動詞的特性が形容詞に変わりうることを示した語用論的アプローチ(Maienborn:2007/2009)がある。それと平行して、状態受動文における過去分詞が文中の項あるいは付加詞を編入し、複合形容詞化した場合もまた、音韻・形態・形態統語・語用論等いくつかの言語レベルで分析されてきた。いずれも過去分詞を一つの領域で扱っており、領域を横断した多角的考察は見られないが故に、過去分詞の素性において統一的な分析案が未だ出ていないという結論に至った。その成果は、論文(Noma: 2018)にまとめ、日本独文学会中国四国支部学会誌に投稿した。

Levin (1993)による動詞の意味分類から、7つの動詞を抽出し、それらの動詞を含む動作受動文と状態受動文をコーパスから抽出した結果、*färben*(Verbs of Coloring)、*schnitzen*(Verbs of Cutting)、*füllen*(Verbs of Putting)においては動作受動文・状態受動文・複合形容詞の形成が可能で、特定の活動後、何らかの成果物が生じる典型的な達成動詞であると言える。さらに、動詞の持つ多義性が動作受動文や状態受動文への変換、あるいは複合形容詞化に影響を与えないことを確認した。次に、*bauen*(Creation and Transformation)の例では、動作受動文の変換のみが可能であり、状態受動文への変換は主題の質に対する言及を条件とし、永続を表す付加詞を挿入することで認容度が高まるが、複合形容詞化が可能となるほどの形容詞性は備えていないことがデータから判明した。これと同じタイプの動詞が Verbs of Searching である。データ分析した *jagen* では動作受動文以外は全て非文であった。動物を狩るという活動のみに焦点が当てられていること、そしてその活動に移動を伴うことが状態受動文の生成を阻む意味的な要因であると考えられる。それに対し、既にあるものが壊される *zerstören*(Destroy Verbs)では、動作受動文・状態受動文そして複合形容詞化も可能である。行為の結果後の状態を含む *ermorden*(Verbs of Killing)は動作受動文と状態受動文への変換のみが許容された。*zerstören* では形として存在する事物が、*ermorden* では生きている対象物がそれぞれ破壊あるいは死を結果状態とする達成動詞に分類されると捉えることができる。以上の調査結果から、Maienborn が主張する、「過去分詞が表す結果状態は、あくまで行為としての一時的な状態である」という主張は状態受動文の一般的な特徴ではあるものの、例外も存在し、その例外こそが状態受動文における過去分詞の素性に対する統一的説明をより複雑にしていることが判明した。この研究成果は、広島独文学会(2020)で口頭発表し、論文(Noma: 2020)として広島独文学会学会誌に投稿した。

これまでの研究から、活動が完了した後何らかの産物が得られる達成動詞による動作受動文と状態受動文への統語変換及び複合形容詞化では、意味論上の障壁が無いことを確認している。そのため、活動後の産物が状態受動文への変換に必須か否かを特定するため、活動動詞及び、その活動動詞に終点を加えた動詞についても受動文の生成における文法性を調査した。例えば、*aufessen*(平らげる)や *austrinken*(飲み干す)では、*essen*(食べる)や *trinken*(飲み干す)という活動動詞に終点を加えることで、通常は生成されない状態受動文の形成が可能となる。このことは、活動動詞が内在的終了点を持たない点を除けば、達成動詞と時間的には同じ構造であることを意味する。こうした動詞の語彙的特徴が、状態受動文の生成が許容されない活動動詞との対比において、活動後の産物の有無にかかわらず、状態受動文の生成に深く関わっていると言える。また、*bauen*(建てる)のような活動動詞は、現在時制を強調する付加詞を挿入することで、一時的な結果状態を表す際に状態受動文を形成できることが判明した。この点は、Maienborn が指摘する *streichen*(撫でる)の例との類似点が指摘できる。この調査結果は、広島独文学会(2020)で口頭発表し、当該分野の専門家から建設的な提案と批判等のフィードバックを得て、考察内容の深化をはかった後、沖縄外国文学会(2021)にて口頭発表し、日本独文学会中国四国支部学会誌にて学術論文(Noma: 2021)を公表した。

次に、獲得を意味する動詞 11 個(*erwerben*, *erringen*, *erbeteln*, *erkaufen*, *erobern*, *ertrotzen*,

erwirken、ergattern、erkämpfen、erschwindeln、erbeuten)では、どのように活動したかという情報が動詞そのものに強く含意されているが、状態受動文を形成しない *bekommen*、*erhalten*、*kriegen*(得る、手に入れる、もらう)の意味的な影響を一切受けることなく、*erbeuten*(略奪する)を除く全ての動詞において、状態受動文が生成されることをデータから確認した。また、*ergattern*(まんまと手に入れる)の例から状態受動文の主語が非常に限定的な意味で用いられる構文においても、主語そのものが持つ意味的な特殊性が状態受動文の生成の可否を決定する要因ではないことが分かった。即ち、動詞が意味的に適した目的語を選択し、それが状態受動文において動詞によって表される活動の結果状態を含意した主語になることで、結果的に主語の質に対する言及にも繋がっていると解釈できる。従って、先行研究で示された「主語の質に対する言及」は、状態受動文の特徴として挙げられるが、それは結果に付随する特徴であり、それが必ずしも、状態受動文の生成の可否を決定付ける要素ではないと結論付けた。また、この11個の動詞と *bekommen* との対比、さらに「建てる」を意味する *bauen*、*errichten*、*erbauen*(建設・建築する)との比較で、動詞本来の意味が広範であり、状態受動文における主語の質への言及が弱くなる場合、状態受動文の生成が制限されるのに対し、どのように活動したかという意味が強く含まれる動詞においては状態受動文が問題なく形成されるという特徴が明らかとなった。この見立てが有効かどうか、他の意味的に似通った語場にある複数の動詞群においても広範に調査する必要がある。この成果は、学術論文(Noma: 2022)としてまとめ、広島独文学会学会誌に投稿した。

最後に、過去分詞形複合形容詞を形成しうる動詞のタイプ及び過去分詞と結合しうる付加詞の意味については、まず始点と終点を持たない状態動詞では、能動文において様態・時間・道具・場所等の付加詞が挿入可能だが、動作及び状態受動文と形容詞化は阻止される。活動動詞でも同様に様々な意味を持つ付加詞が挿入されうるが、終点を持たないため、活動後の状態を表すことができず、状態受動文と形容詞化が阻止される。到達動詞には行為を引き起こす CAUSER がいないため、瞬間的な状態変化後の状態に文の焦点が当てられる。従って、能動文と動作受動文への変換、あるいは状態変化後を表す完了形の動作受動文のみが許容される。達成動詞では、行為の過程に関連する様態・場所・道具・動作主・受益者等の付加詞が能動文に任意に取り込まれる。その上、活動後に生み出された成果(生産物)と結果状態に関連する付加詞は動作および状態受動文の生成を許容するだけでなく、それらは過去分詞と結合し、過去分詞形複合形容詞を生産的に生成する。以上のデータ分析により、行為(ACT)では道具・動作主・時間・場所・様態・原因・受益者が、変化(BECOME)では様態が、後状態(BE)では結果を表す付加詞が文中に挿入されることを語彙概念構造により特定した。同じ様態を表す付加詞でも過去分詞と一語化する場合としない場合があり、それは語彙概念構造における行為(ACT)あるいは変化(BECOME)のどのレベルでその付加詞が挿入されたかで決定されると結論付けた。この分析結果は、沖縄外国文学会の学会誌に学術論文(Noma: 2020)として掲載された。

過去分詞の素性についての研究は、状態受動文の文法性判断の大きな揺れに起因し、語用論的観点からの考察も含まれていたが、本研究の成果によれば、状態受動文の生成の可否は、主題の質に対する言及や成果物の有無だけではなく、動詞そのものが持つ語彙情報に左右されることが実際の使用例によって証明できた事が本研究の成果であると言える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 5件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 Sari Noma	4. 巻 33
2. 論文標題 Zu den Bedeutungskomponenten der Verben bei der Generierung von Passivsätzen und Partizip II-Adjektivkomposita	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Hiroshima Doitsu Bungaku	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Sari Noma	4. 巻 35
2. 論文標題 Verbtypen mit bildbaren P II-Adjektivkomposita und die Bedeutungen der inkorporierbaren Adjunkten	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Southern Review	6. 最初と最後の頁 51-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Sari Noma	4. 巻 51
2. 論文標題 Eigenschaften deutscher Partizip II-Adjektivkomposita	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 DOITSU BUNGAKU RONSHU	6. 最初と最後の頁 5-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Sari Noma	4. 巻 54
2. 論文標題 Bildungsmöglichkeiten des Zustandspassivs bei Aktivitäts- und Errungenschaftsverben	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 DOITSU BUNGAKU RONSHU	6. 最初と最後の頁 5-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Sari Noma	4. 巻 34
2. 論文標題 Bildungsmöglichkeiten des Zustandspassivs bei den Erwerb dargestellten Verben	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Hiroshima Doitsu Bungaku	6. 最初と最後の頁 17-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 野間砂理
2. 発表標題 状態受動文を生成する動詞の意味 - 活動動詞と達成動詞 -
3. 学会等名 広島独文学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 野間砂理
2. 発表標題 過去分詞形複合形容詞の生成にかかる動詞の意味分類
3. 学会等名 広島独文学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 野間砂理
2. 発表標題 状態受動文の形成にかかる動詞の意味
3. 学会等名 沖縄外国文学会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------